

チビ太の夏

吉澤稔雄



昨年のも五月も末近いある晩のこと。いつものように勤めから帰ってきて一風呂浴び、一階の南側の庭に面した部屋で一杯やっているとき、いきなりドンと硝子窓を叩く音がした。見ると、見慣れぬ猫が硝子戸に両の前脚を掛け、部屋の中を覗き込んでいた。目と目が合うと、可愛らしい媚びるような声で一声、ミャーと鳴いた。茶臼鉢割れの和猫で、生まれてからまだ一年とは経っていないと思われる小さな子だった。もちろん、飼い主のいない野良猫であろう。それにしても、見知らぬ人家に突然やって来て、その存在をアピールするとは、何とも大胆な野良猫である。普通、野良なら人を警戒して自ら近寄ってくることはない。何かそれなりの特別な事情でもあったのだろうか。しばらく硝子戸越しに眺めていたら、再び目と目が合って、そいつはまた何かを哀願するようミャーと鳴いた。

「お腹が空いてるんじゃないの」

そう言って家内はやおら立ち上がり、台所に行くとき、我が家の飼い猫用のドライ・フードを小皿に入れて戻ってきた。

「チビちゃん、ごはんですよ」

家内が硝子戸を少し開けて小皿を差し出すと、そいつは餌の匂いがわかったのか、頻りにミャーミャーと鳴きながら近寄って来た。小皿を窓の下に置くと、そいつは周囲を警戒しながらも、夢中になって餌にかぶりついた。

「やっぱりお腹が空いていたのね。チビちゃんは何処から来たんですか？」

家内が話しかけても、そいつは餌を食べるのに夢中で、小皿に顔をつけたままだ。時折首を傾げ、口の中のドライ・フードをガリガリと音をたてて噛む仕草が可愛い。

小皿は直に空になった。すると、そいつはまたミャーと鳴いてお代わりを催促した。家内がドライ・フードを更に一掴み小皿に入れてやると、そいつはまた一心に食べ続けた。

「よつぽどお腹が空いていたのね」

夢中で餌を食べ続ける猫を目を細めて愛おし気に見つめながら、家内は言った。

すると、そこへ我が家の飼い猫のモリスが二階から下りてきて、窓から外の様子を窺いはじめた。特に興奮している様子はなかった。窓硝子に隔てられていた所為か。モリスは硝子戸越しにその小さな猫をじっと見つめていた。

その小さな野良猫は、二皿めを平らげるとや

っと満足したと見えて、庭先の少し離れたところには伏せた。そして身を振るとクネクネして背中を地面に擦り付けた。その様子を見て、私はそいつが雄であることを知った。

野良猫はその後しばらく我が家の庭先で箱座りしてくつろいでいたが、急にスクッと立ち上がると、振り返りもせずは何処かに立ち去っていった。

その野良猫は翌日もやって来た。前日同様に私が夕餉の食卓についてビールを飲んでいると、いつの間にかそいつが窓の下に現れ、座り込んで部屋の中を覗き込んでいたのである。

一階の南側に面したその窓は内側に障子戸があるのだが、その障子戸には障子紙ではなく、日除け用のタープの布が貼り付けてある。これは我が家の飼い猫モリスが爪を立てても破れないようにするための工夫だ。そして障子戸の最上段は採光のため、最下段はモリスが外を見られるように空けてある。だから、雨戸を閉めない限り、外側からも家の中が覗けるようになっていたというわけだ。

私はテレビを見ながら一杯やっていたが、何気なく障子戸の隙間から庭の方を見たら、家中を覗き込んでいる野良公と目が合ってしまった。



った。途端に野良公は甘えるような細かい声でミャーと鳴いた。

家内がその声を聞きつけて台所からやって来た。

「あらあ、チビちゃん、また来たの？ お腹空いてるんでしょ？ 今あげますからね、ちよつと待っててね」

言いながら、家内はモリス用のドライ・フードを硝子瓶から取り出すと、それを小皿に入れて

た。野良公は待ちきれなくて網戸に両の前脚を掛け、ミャーと鳴いた。まさに猫撫で声。人を誑し込む魔力が潜んでいた。

「はい、チビちゃん、ごはんですよ」

家内が硝子戸を少し開けて小皿を差し出すと、そいつは小皿が地面に置かれるのを待たずに餌を口にしようとした。

ガツガツと食べるその食べっぷりは見事だった。食べ終えるのも速かった。もちろん、一粒も残さない。飽食気味の我が家の御猫様とは大違いだ。

そうして一皿めを平らげると、そいつは窓のすぐ下で再び硝子戸越しに家の中を覗き込み、首を傾げた。大きく見開いたその目が餌のお代わりを要求していることは容易に知れた。

「なあに、チビちゃん、もっと欲しいの？」

家内が尋ねると、そいつは家内の顔を見つめ返し、小さな口を開けてミャーと鳴いた。まるで邪気のない幼児のようだ。

「はいはい、今あげますからね」

家内は嬉々として硝子瓶からドライ・フードを一掴み取り出すと、それを小皿に入れた。野良公は再びガツガツと食べ始めた。

背を丸めて無心に小皿の餌を食べるその姿を見て、あらためて小さな子だなと私は思った。

我が家の飼い猫のモリスは猫の中でも大型種に属するラグドールで、そもそも骨格自体が大きい。加えてオスで長毛種だから、見た目の大きさは歴然としている。そんなモリスを見慣れた目には、その野良公の華奢なからだつきが余計に際立ったのかもしれない。それにやっばり不如意な食糧事情の所為か、少し痩せているようにも思われた。

そんなわけで、私はその野良公を「チビ太」と呼ぶことにした。

こうして夕食時に我が家に通い続けるようになったチビ太は、数日後から朝もやって来るようになった。

我が家の朝は早かった。当時、私はまだ会社勤めをしており、午前五時半に起きて六時過ぎには家を出るといふ生活をしていた。家内は私より三十分ほど先に起きて、私の朝食と弁当を用意するのが常だった。

そして弁当をつくり終えた家内が一階の部屋の雨戸を開けたら、南側の窓近くに置いてあるガーデン・テーブルの上で寝そべっていたチビ太が雨戸を開ける音に驚いて地面に跳び下りたのである。

「あらあ、チビちゃん、来てたの？」

家内が声をかけると、庭から立ち去ろうとしていたチビ太は振り返り、また窓の下に戻ってきて座り込んだ。すかさず家内がドライ・フードを小皿に入れて差し出すと、チビ太は夢中になってそれを食べ始めた。

かくてチビ太は我が家の食客となった。朝と晩の食事時になると、チビ太は何処からともなく現れて、餌を食べると、しばらく庭先でくつろいでは、また何処へともなく消えていくのだ



った。

そんなある日、私はモリスのことを案じて家内に言った。

「チビ太には餌をやらない方がいいんじゃないか？」

すると家内は困惑気味に応えた。

「だって、可哀そうじゃないの」

それを聞いたとき、私は漱石の『三四郎』の中で与次郎の言うセリフを思い出した。「かあいそうだとほれたってことよ」……(Pity's akin to love.)の与次郎流の訳文である。私はその時家内の胸の裡を垣間見たような気がした。

「でもさ、チビ太が家のまわりにいると、モリスが外に出られなくなるよ」

モリスには日に何度となく外に出て近所を徘徊する習慣があったのだ。チビ太が家の周辺にいたら、徘徊中のモリスと接近遭遇する可能性は充分ある。雄同士だから、出会えば派手な喧嘩にもなりかねない。モリスは図体こそ大きい、実戦経験は皆無だから、百戦錬磨の野良に太刀打ちできるのか、甚だ心許ない。噛まれたり引つ搔かれたりする可能性もあり、その場合、怪我だけでなく、雑菌やウイルスまみれの生活をしている野良から悪い病気を貰うことになるかもしれない。いずれにしても、チビ太

が家の周辺をうろついていたら、モリスを外に出してやるのができなくなる。

「でも……やっぱ可哀そうでしょ」

少し考えてから、家内はあつけらんかんとした表情でそう言った。すでに彼女なりの結論が出ているということか。

確かに、私の言い出すが遅かった。言うなら、チビ太が来た最初の日に言うべきだったのかもしれない。



その翌日、仕事を終えて帰宅すると、モリスの餌用ボウルが新しいのに代わっていた。聞けば、これまでモリスの使っていたボウルをチビ太用に使うのだという。さらには、ドライ・フードを入れる硝子瓶がもうひとつ増えていた。ドライ・フードもチビ太用に別のを買ったという。モリス用の高級ドライ・フードをチビ太にあげるのは勿体ないからと考えたらしい。

六月になった。そろそろ梅雨入りを迎えようかという頃になって、チビ太はパツタリと姿を見せなくなった。

「何かあったのかしらねえ」

家内は心配そうに言った。

「チビ太にも事情というものがあるのさ」

私は上の空で聞きながら、そう応えた。

「そうか、チビちゃんも男の子だから、恋の季節を迎えて遠征に出かけたんだわ。きつとそうよ。それに違いないわ」

家内はそう言って、自分勝手に納得したようだった。チビ太の股間にぶら下がっているものを見れば、去勢されていないことは明らかだから、あながち家内の推測が間違いだとも言い切れない。あるいはそんな事情もあるのかもしれないという外はなかった。

「そうよね、チビちゃんも忙しいんだわ」

「何が忙しいもんか」

……家内とそんな話をした翌日の晩、いつものように一階の南側の庭に面した部屋で一杯やっている、チビ太が庭にやって来て硝子戸越しに家の中を覗いた。

「おーい、チビ太が来たぞお」

台所で夕餉の支度をしている家内に私は声をかけた。家内はすかさず反応して、南側の窓辺にやって来た。

「あらあ、チビちゃん、何処へ行ったの？」

言いながら家内は硝子戸を少し開け、頭だけ外に出して様子を窺った。

「違うっ！ チビちゃんじゃない！」

家内が驚いたような声を上げた。

私も窓辺に近寄って、障子戸の下の隙間から庭を見た。そうして目に入ってきたのは、茶トラの猫だった。顔だけ見ればチビ太に似ていないこともなかったが、鉢割れではなかった。全身が茶色の茶トラだったし、身体もチビ太よりひとまわりほど大きかった。

「何だ、別物か」

私がそう言っているうちにも、家内は見知らぬその猫に拒否反応を示し、シツ、シツと頻りに手を振ってそいつを追い払おうとしていた。

その猫もチビ太と同じ境遇の野良猫のはずなのに、心の優しい家内にしては案外冷淡な扱いだった。

しかし、その猫はなかなか立ち去ろうとしなかった。私は庭に出てそいつを追い払おうとした。そいつが庭にいますと、チビ太が来たくても来られないと思っただからだ。

人が近づいて行けばそいつはすぐに逃げたものと思っていた。だが、距離を詰めて行くとその分そいつは離れて行くものの、尚も居続けようとした。じつとこちらの様子を窺って、隙あらば挑みかかろうとしているような気迫さえ漲らせていた。なかなか胆の据わった奴だと私は思った。しばらく睨み合った後、一挙に距離を縮めて道路際まで追い詰めると、そいつはやっと退散して、向かいの家とその隣の家の間の隙間に消えていった。

その茶トラもやはり雄だった。私はそいつを「グレ太」と呼ぶことにした。

その後も時々グレ太は我が家に来てきた。家の中を覗いていくこともあれば、庭をただ横切って通り過ぎていくこともあった。毎日来るわけではなく、やって来る時間もまちまちで、長居するようなことはなかった。

家内はその太々しい態度を嫌って、決してそ

いつに餌をやるうとはしなかった。

梅雨に入って数日が経ったある晩、チビ太はまたひよつこりと現れた。シトシトと小糠雨が降っていた。硝子戸をドンと叩く音がしたので、その音のした方を見ると、硝子戸越しにチビ太の顔が見えた。思わず鉢割れを確認した。チビ太に間違いなかった。

よくよく見れば、チビ太の右の前脚には黒く長い筋がついていた。傷跡のようだった。その黒っぽい筋の幅から察するに、結構な深手のように思われた。

「あらあ、チビちゃん、どうしたのそのおてては？」

家内もチビ太の前脚の傷にすぐに気づいて、気遣わしげにそう尋ねた。

「たぶん、何処かの雄猫と決闘でもしたんだろうな」

「あのグレ太かしら？」

「そうかもしれない。別の雄かもしれない」

「グレ太よ。あいつに決まっているわ」

思い込みの激しい家内は、何の根拠もなく喧嘩の相手がグレ太だと決めつけた。

「あのグレ太め！ 何てひどいことをするんでしょ」



そう言いながら、家内はドライ・フードの硝子瓶に手を伸ばして一掴み取り出すと、チビ太用のボウルに入れて、それをチビ太の前に差し出した。

「何だか痩せちゃったみたいね」

「その怪我の所為でしばらく動けなかったんじゃないか？」

「それでしばらくうちに来られなかったの？ おお、可哀そうにねえ」

チビ太は早速ボウルに顔を突っ込み、餌を食り始めた。ボウルはすぐに空になり、チビ太はお代わりを要求した。

「そうか、そうか、食べられるようになったんなら、もう大丈夫だな」

「そうだよ、チビちゃん。いっぱい食べて、早く大きく強くなつてね。グレ太なんかやつけてやりなさい」

「おいおい、喧嘩をけしかけてるのか？」

「だって、野良の雄猫が生きていく上で闘いは避けられないでしょ。それこそ命懸けの死闘をするわけだから、負ければ縄張りを失うか生命を失うか……」

確かに、チビ太は、頼れる者もなく、野良猫として過酷な生を懸命に生きているのに違いなかった。そう思うと、私はチビ太が不憫でならなかった。

それにしても、チビ太はいったい何処をねぐらとしているのか。それは我が家からほど遠くないところにあることはわかっていた。いつもチビ太が消えて行く、向かいの家と家の隙間の狭い通路の先だろう。その先にはコンクリートの塀があり、更には広い駐車場付きのアパートがある。チビ太のねぐらは、たぶん、

そのアパートの敷地内にあるのではないかと私は思っているが、余所様の敷地に勝手に入るわけにはいかないから、調べようがない。

梅雨を迎えたこの時季、懸念されるのはそのねぐらがしつかり雨露を凌ぐことのできる場所なのかどうかという点だ。この先、冬になれば、そこで寒さに耐えられるのかどうかも切実な問題となろう。野良の新米と思しきチビ太が来るべき厳しい冬を乗り切れるかどうか。大いに気になる場所であった。

そんな私や家内の心配をよそに、チビ太はその後毎日朝と晩に餌を貰いにやって来た。慣れてくると、早朝にやって来て、家内が戸を開けるのを待ちきれずに、可愛らしい声で鳴いては餌を催促するようになった。とりあえず食欲を満たすことがチビ太にとっては最重要課題なのに違いなかった。

しかし、野良猫といえども、来る日も来る日も同じドライ・フードばかり食べ続ければ、やつぱり飽きがくるものらしい。

ある日、チビ太は専用のボウルに入れたいつものドライ・フードを半分ほど食べ残した。腹が満たされたわけではないことは明らかだった。その証拠に、チビ太はボウルの前から離れようとはしなかった。このことは飼っている猫のモリ

スで何度も経験済みだから、驚くにはあたらない。猫にはありがちなことだった。

試しにモリス用の高級ドライ・フードをやってみた。チビ太はすぐに違いがわかったらしく、今度は喜んでそれを食べた。

悪い予感がした。これにより食べ残せば別のもっと美味しい餌が貰えることをチビ太は学習したはずだった。

案の定、しばらくすると、チビ太はモリスの高級ドライ・フードも食べ残すようになった。仕方がないので、食べ残したドライ・フードに湯掻いてほぐした鶏の笹身を混ぜ込んでやった。もちろん、その笹身はモリスのために用意してあったものである。チビ太がそれを喜んで食べたことは言うまでもない。

するとその翌日、家内はスーパーに買い物に行ったついでに、鶏の胸肉を買ってきた。どうやらそれはチビ太用に買ったものらしい。笹身ではなく胸肉を選んだのは、家計の遣り繰りをも考えてのことだったろうが、やはり飼い猫のモリスとは差をつけておきたいという気持ちも家内にはあったようだ。

しかし、チビ太にしてみれば、笹身と胸肉の違いなどはどうでもよかった。鶏肉であれば、ドライ・フードよりはましと思っていたに違い



ない。もちろん、チビ太は胸肉でも喜んで食べた。これでしばらくは摂食拒否という事態は避けられそうだった。

「おいおい、チビ太よ、お前はいったい何様のつもりなんだよ？」

私はチビ太に尋ねてみた。言ってみれば、チビ太はホームレスのお貰いさんだ。もっと美味しいものを寄越せなどと贅沢を言える立場にはないはずだった。

しかし、そうは言っても、あの愛くるしい声で囁かれたら、無下に突っぱねることもできない。笹身もよいが、刺身が食べたいなどと言われたら、どうしようか。まあ、鮪は無理にしても、鱈くらいなら……などと余計な心配をする始末だった。

本格的な梅雨を迎えて雨の日が続くようになると、チビ太は朝食を貰いに来て、そのまましばらく庭に居続けるようになった。雨宿りのつもりだったのだろうか。家の南側の窓辺に置いてあるガーデン・テーブルの下なら、余程強い雨でもなければ濡れる心配はなかった。それに、テーブルの下には庭の手入れをするための道具を入れた箱やプランターなどが置いてあり、身を隠すにも都合良かった。

当初、チビ太は早朝にやって来て、昼近くまで居たのだが、次第に我が家の居心地のよさがわかってきたのか、時には夕方頃まで居続けることもあった。これで天敵のグレ太さえ来なければ、何の心配もなかったはずである。

しかし、チビ太は夕食を貰うと必ず自分のねぐらに帰っていくのだった。たぶん、そのねぐらがチビ太にとっては一番安心できる場所だったのだろう。



家内はそんなチビ太のために段ボール箱を用意して、中には古いバスタオルを敷き、それをガーデン・テーブルの下に置いた。当然、チビ太は喜んでその中に入るものと思われた。一般的に猫は箱が大好きで、とにかく箱があれば本能的にその中に入ろうとするものだ。チビ太も例外ではないと思っていた。

しかし、チビ太はなかなかその箱に入ろうとはしなかった。何かを警戒していたのだろうか？ 時々グレ太が我が家の庭にやって来ることも関係していたかもしれない。

私はもしやと思い、段ボール箱の改良版を試作してみた。家内が用意したのは蓋のないただの段ボール箱だったが、私は蓋をした状態の箱の側面に丸い穴を割り抜いて、そこから出入りできるようにしてみたのである。これなら身を

隠すにも都合がよいし、冬には風よけにもなるはずだ。名付けて野良猫ホイホイ。試しにこれをモリスに見せたところ、モリスは何の躊躇いもなくスツとその箱に入った。

そこで、早速この野良猫ホイホイを目立つようにガーデン・テーブルの上に置いてみた。ところが、チビ太はやっぱりその中に入ろうとはしなかった。捕獲用の罠だとも思ったのか。確かに、中に入って穴を塞がれたら逃げようが



ない構造になっていた。それでも気にはなっていないらしく、チビ太は訝しげに時折穴の中に顔を突っ込んで中の様子を窺っていた。そして終いには箱の上に乗る、箱座りしてくつろいでいるような始末。これは想定外のこと、箱の天面はチビ太の体重を支えきれなくなるほどの強度がなかったから、すぐにへこんでしまった。そこで、私は急遽天面の内側に筋交いを取り付けて補強することを余儀なくされた。

チビ太がこの野良猫ホイホイの中に身を隠すようになるには、この先なおしばらくの時間を要した。

そうこうするうちに梅雨が明け、本格的な夏の訪れとともに強い陽射しが照りつけるようになった。気温もグンと上がってきた。

冬の寒さはもちろんだが、この夏の暑さもまた野良の猫にとっては耐え難い試練に違いなかった。

七月も末近いある日のこと、仕事を終えて帰宅すると、一階南側の庭に面した部屋にケージが置かれているのが気がついた。見覚えのあるそのケージは、十二年前に生まれて間もないモリスを我が家に迎え入れた際に購入したものであった。当時のモリスは、しかし、まだ幼すぎ

て人のそばにいないと落ち着くことのできな
い子だったから、結局そのケージを使うことは
ほとんどなかった。そこで私は買ってから何日
もしないうちにそれを折り畳んで二階の納戸
の隅に置き、そのままずっと放置していたのだ
った。そのケージを引っ張り出してきて部屋に
置いたのは、もちろん家内である。

「これ、どうするの？」

私は家内に尋ねてみた。

「チビちゃんをね、捕まえるの」

家内は決まりが悪そうにそう応えた。家内が
私に相談もせず計画を実行に移すのは、それだ
け意志が固まっていることを意味していた。

「捕まえてどうするの？」

「うちの子にするの」

……そうか、やっぱりそういうことだったの
か。薄々気がついてはいたが、あらためて家内
の口からそれを告げられると、私はちよつと複
雑な気持ちになった。

敢えて反論はしなかったが、私は野良猫を家
猫にするのは容易なことではないだろうとは
思っていた。もちろん、家内もそれを承知の上
で決意したのに違いない。

「うまくいくかな？ それに、捕まえたとして
も、モリスや俺たち家族に慣れるまでには相当

な時間がかかるかもしれないな」

私はいちばんの問題はモリスだと思ってい
た。果たしてモリスがチビ太を受け入れてく
れるのかどうか……。

「わかってる。長期戦は覚悟の上よ」

家内はあらためて決意表明をした。

実際のところ、チビ太を捕獲するのは容易な
ことではなかった。

庭にやって来るチビ太をどうやって家の中
に置いたケージに誘い込むか、それが問題だっ
た。基本的には餌で釣るしか方法はなかったが、
何分にもチビ太は警戒心が強く、まんざらバカ
でもなかったから、そう単純には事は運ばな
かった。

餌もいつものドライ・フードや鶏の胸肉では
効果はなかった。そうなると、餌のグレードを
上げる必要があった。いつもの猫定食がだめな
ら、目先を変えた料理を何種類か用意して猫御
膳にでもすればよいのか。

とはいえ、チビ太のためにだけ特別料理を用
意するなど馬鹿げた話で、家内もそこまで考
えてはいなかったはずである。そこで、その日
その日の私の酒の肴を少しだけチビ太に分け
てやることにした。鰯の開きや塩鯖などの焼物、

焼鳥、缶詰の鯖の水煮等々、時にサーモンや鮪
の刺身などである。チビ太は何でもよく食べた。
チーズや豚肉の生姜焼きなども食べた。それら
を窓枠から敷居、ケージの出入口、そしてケー
ジの中へ点々と置き、チビ太を誘い込もうとい
う寸法だ。

初めのうち、チビ太は窓辺で立ち上がって前
足を伸ばし、窓枠と敷居のところの餌を取るの
が精一杯だった。そのうち、家の中に入り込
むようにはなつたが、餌を啜えるとすぐさま庭
に跳び下りてしまうのだった。窓を閉められて
逃げ場を失うのを畏れているようだった。なか
なか用心深い。

やっぱりチビ太を捕まえるのは無理なのか
と諦めかけていたある晩のこと、チビ太は夕食
後もしばらく庭
に留まり、遂には
家内の用意した
段ボール箱に入
って、その中で寝
ようとしたので
ある。いよいよね
ぐらを我が家の
庭に移すことを
決めたのか。



チビ太を家の中のケージにおびき入れることに私や家内が腐心していた最中、こうしてチビ太が庭に置いた段ボール箱の中で一夜を過ごそうとしているところを見ると、一縷の希望が見えてきたようにも思われた。

しかし、雨戸を閉めた後、しばらくして外の様子を見に行くと、段ボール箱の中にチビ太の姿はなかった。チビ太はやっぱり自分のねぐらに帰ったようだった。

夏の間中、我が家の飼い猫モリスの楽しみは蝉を捕まえることである。不思議なことに、モリスが二階のヴェランダで待っていると、蝉が空から降ってくるのだ。おそらくは移動中の蝉が翅を休めるためにヴェランダのアルミ柵にとまろうとしてやって来るのだろう。アルミ柵には引っ掛かりがないから、蝉は滑ってとまることのできない。それでも、蝉は何とかとまろうとして柵に何度もぶつかって来る。そこをすかさずモリスが猫パンチを繰り出し、ヴェランダの床に叩き落として捕まえるのだ。モリスは優秀なハンターである。

ハンターのモリスは蝉を捕まえると、それを口に咥えて自慢げに私や家内に見せに来る。その蝉をポトリと床に落とし、どうだと言わんば



かりに目を輝かせて飼い主の顔色を窺うその様はやんちゃ坊主そのもの。実に愛らしい。

落とされた蝉はひっくり返った状態でギーギー鳴きながら翅をバタつかせ、床の上で回転する。するとモリスは左右の前足を交互に繰り出して蝉を弾き、ドリブルを繰り返す。時にそれを口に咥えて放り投げる。そんなことを繰り返すうちに、蝉は翅を挽がれ、頭を食いちぎられた蝉は、もはやモリスの興味の対象外となり、打ち捨てられる。

そして、モリスは再びヴェランダの出入口付近に張りつき、次の獲物がやって来るのを辛抱強く待つのである。

こうして夏の間中モリスはずっと蝉捕りに熱中しているので、ほとんど外に出たいとは言

い出さない。チビ太が庭で過ごす時間が長くなってきていたので、これは好都合だった。

しかし、夏が過ぎて蝉がいなくなったから、モリスはまた外に出たいと言いつつに違いなかった。

九月に入り、秋の長雨の季節を迎えると、さすがに蝉の数も減って、二階のヴェランダに飛んで来ることも滅多になくなってきた。モリスは相変わらずヴェランダの出入口近くに臥せっては蝉がやって来るのを待ち続けた。しかし、雨が止んでも蝉の声がしなくなり、モリスは空しく待ち続けて、そこで眠り込んでしまうことが多くなった。

チビ太は相変わらず我が家に餌を貰いに通い続けていたが、以前ほど長居はしなくなっていた。そして長雨の季節が過ぎ、いよいよ秋めいた気候になってきた頃から、チビ太は時々姿を見せなくなった。朝に来ない日があったかと思ふと夕方に来ないこともあり、時にまる一日来ないこともあった。

さて、蝉が完全に姿を消してしばらくすると、モリスはまた外に出たがるようになった。アーンと鳴いて、一階の庭に面した部屋の硝子窓の隅をカリカリと前足で引っ掻くのがその合図



だった。外に出て自分の縄張りをパトロールするのは以前からの習慣だから仕方がない。チビ太が庭にいない時間が増えてきたのが幸いだ。そこで、時間帯を見計らい、近くにチビ太がいなくても確認した上でモリスを外に出してやることにした。

モリスの行動範囲は狭い。我が家を中心に、せいぜい半径二十メートルの圏内に限られていた。我が家のある一帯は住宅密集地だから、

パトロールで見回るポイントはいくつもなかったが、外に出してやっても三十分もしないうちに戻ってくるのが常だった。

しかし、これが日に一度で済めばよいのだが、二度三度と繰り返すから世話が焼ける。外に出してやるのはよい。窓を開けてやれば勝手に出ていくのだから。ところが、帰ってきた時、窓を開けてやってもモリスは自分から家の中に入ろうとはしないのだ。そこで無理矢理捕まえようとすると、臍を曲げてまた何処かに行ってしまう。仕方がないので、 \langle CIAOちゅる \rangle を一口二口舐めさせ、それで家の中に誘い込むという次第である。ひよっとしたら、モリスはこの \langle CIAOちゅる \rangle が欲しいばかりに、日に何度も外に出たがるのではないかとさえ思ったこともある。外に出て帰ってくれば、あの美味しい中毒性濃縮まぐろエキス・ペーストが貰える……とモリスは学習したのかもしれない。真相は定かではないが、その可能性は否定できない。

まあ、ともかく秋になって、またモリスの縄張りパトロールが始まったのであった。

事件が起きたのはモリスがパトロールを再開して二週間あまり経った頃だった。

ある晩、同居している長男がモリスの身体に異変があるのに気がついて、それを家内に報告した。尻尾の付け根近くの背骨のところ腫れてぶよぶよしているというのだった。特に痛がっている様子は見られなかったが、言われた所に触れてみると、確かにそこは腫れているようだった。

モリスの身体にいったい何が起きているのか？ 心配になってネットで調べてみた。腫れる原因は傷か腫瘍によるとあった。しかし、腫れている部分に傷は見当たらなかった。すると腫瘍なのか？ もしかして癌？ モリスはこれまで十二年間病気に罹ったことはまったくなかった。そのモリスが何やら病魔に襲われているのかと思うと、家内も私も俄かに不安を覚えた。いずれにしても、素人には手の施しようもなく、なるべく早めに獣医師に診てもらおうしかなかった。

翌日、近所の動物病院に電話したところ、すぐに診てくれるというので、早速私は家内とモリスを車に乗せて動物病院へと向かった。

病院内には家内がキャリー・ケースに入れたモリスを連れて入り、私は外の駐車場で診察が終わるのを待つことにした。

一時間ほどして家内とモリスが病院から出

てきた。

「どうだった？」

私が尋ねると、家内はニコツとして答えた。「腰のところに小さな傷跡があつてね、そこから菌が入って化膿したんだろうって」

私はそれを聞いてホツとした。

「たぶん、野良猫と喧嘩でもして、噛まれたか引つ搔かれたかしたんじゃないかって言うのよ。それにしてもねえ、猫同士がやり合うとすれば普通は正面戦になるから、腰をやられるのはおかしいですよねって言われちゃったわ」

言われてみればその通りで、普通なら顔か前脚をやられるのだろう。

「確かにね、モリスには鈍臭いところがあるからな」

……とまあ、そんなわけで、モリスは傷のある部分の毛を刈られ、腫れたところを切開されて、中に溜まっていた膿を絞り出してもらったという次第である。

なお、切開した傷跡を舐めると、菌が体内に入ってしまう恐れがあるので、傷口が完全に塞がるまではモリスにエリザベス・カラーを装着するよう獣医師に求められた。

モリスにとってはまったくもって迷惑な話である。帰宅してすぐにエリザベス・カラーを



つけてみたところ、モリスはまっすぐに歩けなくなつてしまった。壁にぶつかり、柱にぶつかりしてヨタヨタ歩く様子は、まるで酔っ払いのようだった。可哀そうだったが、とにかく傷口が塞がるまでは辛抱してもらおうしかなかった。

「モリスは誰にやられたんだろうかね？」

その晩、いつものように食卓について一杯やりながら、私は家内に言ってみた。

「さあね、グレ太かしら？ まさかチビちゃん？……」

とにかく、モリスがパトロール中に何処かで野良猫に遭遇して、一戦交えたことは間違いないかった。モリスの縄張り内をうろついているのは、差し詰めチビ太かグレ太しかいない。

「もうモリスは外には出してやれないな」

「そうね。動物病院の先生にも言われた。飼い

猫は外に出すもんじゃないって。それに家の中に居ても、野良猫を近寄らせちゃだめだって」

「まあね、安全第一に考えたら、医者はその言うわな」

この日、チビ太は姿を見せなかった。

獣医師からは五日分の抗生剤の飲み薬が処方されていた。六日目に再び診てもらったところ、新たな化膿は認められず、一応完治ということになった。切開した傷跡も塞がり、瘡蓋もとれたので、もう拷問具のようなエリザベス・カラーは必要がなくなった。

モリスは再び自由になった。但し、それは家の中でだけ。今後はもう外に出て気ままに歩き回ることはできない。私も家内も心を鬼にしてモリスを外出させないことに決めたのだ。

この一件があつてから、チビ太はまったく我が家に寄りつかなくなった。近所で見かけることもなくなった。どこか別の場所にも行ってしまったのだろうか？

私と家内は、その後しばらく、毎朝毎晩チビ太が庭に来ているかどうかを確認しないではいられなかった。

モリスもまた障子戸の下の隙間から庭を眺め続けていた。 (二〇二二年九月二八日)